

平成28年度第2回
東京都江戸東京博物館資料収蔵委員会
(資料収集部会) 議事録要旨

平成29年1月31日(火)
東京都江戸東京博物館 2階会議室

午前9時57分開会

富岡文化施設担当課長：それでは、ちょっと時間前ですけれども、皆様おそろいですので始めさせていただきます。

改めまして、本日は大変お忙しい中、御出席いただきまして、どうもありがとうございます。

ただいまから「平成28年度第2回東京都江戸東京博物館資料収蔵委員会(資料収集部会)」を開催いたします。

私は、東京都生活文化局文化振興部の文化施設担当課長の富岡と申します。議事に入りますまで司会を務めさせていただきますので、どうぞよろしく願いいたします。

初めに、東京都生活文化局文化施設改革担当部長の越から御挨拶を申し上げます。

越文化施設改革担当部長：おはようございます。東京都生活文化局の越でございます。

委員の皆様におかれましては、大変お忙しい中、本委員会に御出席いただきまして、ありがとうございます。

今回は本年度第2回目の収蔵委員会でございます。購入資料51件のほか、寄贈資料などについてお諮りをさせていただきます。当館に収蔵資料としてふさわしいものであるか、専門的観点から御審議をいただければと存じます。よろしくお願い申し上げます。

当館は既に『江戸東京博物館NEWS』などでお知らせをいたしておりますが、1階ホールをはじめ、エスカレーターやエレベーター等の改修工事に入るため、本年10月から来年3月まで、約半年間、全館休館をいたします。また、ホール改修の影響を受けます1階の特別展示室につきましては、さらに加えて1年間、平成30年度末まで休室を予定しております。大変御不便をおかけいたしますが、こうした改修を通じまして、これまで以上に東京を代表する歴史と文化の情報発信拠点として、一層魅力ある施設となるよう努めてまいりたいと存じます。また、工事中も資料収集及びこの収蔵委員会の運営につきましては継続して実施してまいりますので、引き続きよろしくお願い申し上げます。

本日は限られた時間でございますが、忌憚のない御審議のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。

富岡文化施設担当課長：続きまして、東京都江戸東京博物館、藤森館長から御挨拶を申し上げます。

藤森館長：今回は前回のような大物があるわけではないのですけれども、ただ、私が見た中では、たても園の「会水庵」という茶室があるのですが、その中に置くものがないという状態だったのですけれども、宗徧流の茶人であった会水さんの御遺族から、なかなか見どころのある道具の寄贈の申し出があってちょっと楽しみにしております。

何とぞ御審議よろしくお願い申し上げます。

富岡文化施設担当課長：続きまして、本日御出席いただいております委員の皆様を紹介させていただきます。私の向かって左側の席から順に紹介をさせていただきます。

まず、大口委員でございます。

松尾委員でございます。

森委員でございます。

金子委員でございます。

神谷委員でございます。

山梨委員でございます。

植木委員でございます。

小島委員でございます。

中村委員でございます。

続きまして、事務局職員を紹介させていただきます。

江戸東京博物館副館長の小林でございます。

事業企画課長の新田でございます。

どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、まず、委員長、副委員長の選任をしたいと思います。当部会の委員長、副委員長でございますけれども、前回と同様に、毎回委員の方々の互選で定めるということになってございますので、委員の皆様で、委員長、副委員長の推薦、選任をしていただければと思いますけれども、いかがでございましょうか。

小島委員：前回と同じでよろしいかと思えます。

富岡文化施設担当課長：皆様いかがですか。

（「異議なし」と声あり）

富岡文化施設担当課長：そうしますと、大口委員に委員長をしていただいて、金子委員に副委員長をしていただくということになりますけれども、お二人ともよろしいでしょうか。

それでは、大口委員と金子委員には席をお移りいただければと思います。

（大口委員、委員長席へ移動）

（金子委員、副委員長席へ移動）

富岡文化施設担当課長：それでは、委員長に進行をお願いします前に、前回に続きまして本委員会の公開について申し上げます。

当部会でございますが、東京都江戸東京博物館資料収蔵委員会設置要綱第12の規定によりまして、原則公開となっております。そのため、委員の皆様のお名前と現職名は、東京都のホームページ上で公開しております。

議事内容の公開につきましては、資料収集決定前の審議の段階で対象資料の詳細を公開することによりまして、現在の資料所有者に不利益を生じさせるおそれがあるということ、また、資料の実物確認につきましては、所有者の方から説明の参考用に借用しているということから、前回の資料収集部会と同様、本日の段階では非公開とすることが適切と考えてございます。

このことにつきましては、前回の資料収集部会におきまして委員の皆様にお諮りをした結果、冒頭のみ公開ということで、議事内容については議事録によって公開をするという

ことで決定をしてございます。

なお、当部会の議事録の公開につきましては、委員の皆様事前に確認をさせていただいて、その後で公開とさせていただきたいと思っております。

本日、プレスも傍聴者もございませんので、このまま進めさせていただきます。

それでは、大口委員長、金子副委員長、議事のほう、よろしくお願いいたします。

大口委員長：大口です。金子先生と一緒に、きょうの議事の運営に当たらせていただきたいと思います。

早速議事に入りたいと思います。最初に事務局のほうから、今年度の資料の収集方針と、本日審議いたします収集予定資料の説明をお願いいたします。

新田事業企画課長：説明させていただく前に、お手元の資料の御確認をお願いいたします。

まず一番上でございますのが会議次第でございます。

資料1、委員名簿。

資料2、収蔵委員会設置要綱。

資料3、東京都江戸東京博物館資料収集具体的方針。

資料4、平成28年度東京都江戸東京博物館における収蔵品購入に関する方針について。

資料5、平成28年度第2回資料収蔵委員会説明資料、A4、それぞれ縦版でございます。

資料6、平成28年度第2回資料収蔵委員会付議資料、こちらはA3横版となっております。

また、パンフレットなどが入りました封筒をお配りしております。遺漏等ございませんでしょうか。よろしいでしょうか。

なお、お配りした名簿の肩書などに誤りがございましたらば、恐縮ですが、後ほど事務局へ御連絡いただければと思います。

では、今年度の資料の収集方針と収集予定資料の説明をさせていただければと思います。

まず、江戸東京博物館では資料3にございます「東京都江戸東京博物館資料収集具体的方針」にのっとりまして、当館の展示及び研究の用に供する資料を収集する方針をとってございます。

今年度の収蔵方針については、資料4を御確認いただければと思います。「平成28年度東京都江戸東京博物館における収蔵品購入に関する方針について」に掲げてございます。その中でも特に、これから申し上げます3つのポイントを重点に収集活動を進めてまいりました。

まず第1に、方針3の(1)に基づきまして、平成30年に東京府誕生150年を迎えるということから、これに関連した東京の都市発展の歴史を示す近現代史資料を重点として収集活動をいたしました。

第2に、方針3の(2)に基づきまして、2020年東京オリンピック・パラリンピックに向けて、海外からの来訪者が東京の文化的な魅力を感じることができる資料というところを注意してまいりました。

そして、第3に、方針3の(3)に基づきまして、国際的視点に基づく展示や調査研究など、東京都の都市外交に寄与できる資料の収集に努めてまいりました。

続きまして、今回御審議いただく資料について御説明をさせていただきます。一番大きなA3サイズ、横版の資料6をごらんください。

番号を振っておりますけれども、2枚おめくりいただきますと1ページ目になりますが、こちらに総括表をお示ししてございます。今年度第2回の付議資料は、先ほどございましたが、購入資料51点、寄贈資料975点、管理換資料1点がございます。

まず、購入資料でございますが、内訳は、標本資料が37点、映像資料が14点となっております。分類別の内訳は、絵画13点、工芸品6点、生活民俗2点、典籍6点、印刷物10点、映像音響の静止画が14点でございます。

続いて、寄贈資料ですけれども、絵画11点、書跡44点、工芸品35点、生活民俗9点、典籍85点、文書類172点、印刷物59点、そして、図書資料のマイクロフィルムが298点、映像音響の映像テープが261点、静止画が1点でございます。このうち、数が際立ちます図書資料と音響テープでございますけれども、現在、寄託資料となっております東京空襲を記録する会のマイクロフィルムと録音テープを、このたび、寄託から寄贈に切りかえる運びといたしたく、付議するものでございます。

次に、管理換ですけれども、こちらは東京都政策企画局からの移管資料1点でございます。

この後のページには、購入、寄贈、管理換の順で、入手先と分類別の内訳及び資料リストをお示ししております。

最後に報告事項として、平成27年度の図書の購入状況をお示ししております。

続きまして、主立った資料につきまして個別の説明をさせていただきます。A4縦版の資料5「平成28年度第2回資料収蔵委員会（資料収集部会）説明資料」をごらんください。また、A3横版の資料6の4ページ以降に資料リストがございます。この表の左端の番号が説明番号となっておりますので、よろしければあわせてごらんください。

では、資料5に基づきまして、購入資料のほうから御説明を差し上げます。

まず、1番「紅縮緬地御所解模様一つ身、縹緇子地菊折枝唐扇模様打掛」でございます。説明番号は、資料6の4ページのNo.6と7でございます。

一つ身は、嬰兒から1～2歳ぐらいの子供の衣装で、身幅を一幅の生地で作っています。本資料は、紅色の縮緬地に模様の部分は白上げとし、金糸や色糸刺繍で加飾した振袖です。模様は長寿と御世を寿ぐ謡曲『菊慈童』を想起させる御所解で、子供の健やかな成長を願う吉祥模様となっております。打掛は、小袖の上に打ち掛けて着る高位女性の表着で、身丈、身幅とも小袖よりやや大きい裾長の衣装です。

本資料は、状態が非常によい光沢に富んだ緇子地で、手折った菊花と唐扇を全体に散らした模様を、金糸を含む華やかな彩糸の刺繍であらわしております。ともに、武家子女の典型的な衣装として展示をしたいと考えてございます。

2番目です。「17世紀の江戸を紹介した洋書」でございます。リストは、4ページ目のNo.14、15でございます。

江戸前期の日本を紹介した洋書のうち、代表的な書物である『東インド会社遣日使節紀行』と『日本誌』を付議させていただきます。前者は、オランダ人牧師モンタヌスが、遣日オランダ使節の参府日記などをもとに、日本の歴史や風俗を記した書物で、後者は、オランダ商館付の医師として江戸参府をしたケンペルが記した日本研究書です。それぞれ、明暦の大火を描いた挿絵や、将軍謁見の場面を描いた挿絵で有名です。

今回付議するものは、『東インド会社遣日使節紀行』が1669年（寛文9）発行のオランダ語初版で、『日本誌』が1728年（享保13）刊行の英語初版の第二刷です。

当館では、挿絵の断片や後刊の要約版など、不完全な形でしか収蔵しておらず、今回の収集によって展示と研究の向上を図りたく存じております。

続きまして、3番目「錦絵・刷物類」です。説明資料は同じく4ページ、No.1から5に当たります。

「中村座内の図」は、「中村座内外の図」6枚続きのうち、内部を描いた3枚で、曾我狂言の対面の場。外観を描いた3枚は平成4年度に収集しておりまして、今回の収集で6枚ぞろいの作品として完成をいたします。また「雨舎春の道づれ」は、角兵衛獅子、万歳、太神楽、猿回し、住吉踊り、凧売り、福寿草売りなど、正月の景物である大道芸人や物売りなど、さまざまな人々が雨宿りをする図でございます。安政江戸地震後、歌舞伎興行ができず、舞台絵がない時期に版行され、歌舞伎役者の似顔絵で描かれております。

2種とも、当館コレクションの充実に資する作品でございまして、江戸の歌舞伎、四季、出版などの展示での活用が見込めます。

続きまして、4番目「近現代資料」でございます。説明番号は、標本のほうが同じく4ページ、No.12、13と16から27でございます。また、映像音響資料ですけれども、資料6の7ページ目のNo.2、3、5でございます。

こちらは明治から昭和中期にかけての近現代資料でございます。注目されるのは、千葉県と東京本所を結んだ総武鉄道に関する映像資料です。明治37年開業の両国停車場の写真や、日本最初の高架鉄道と呼ばれる本所一両国間の市街高架線の工事写真。また、明治40年に総武鉄道が国営化された際の記念写真がございます。また、昭和37年に東京都が発行した都民生活の実態に関する紹介パンフレットや、池袋サンシャインシティの入居案内チラシなどもございます。

いずれも、明治から戦後の高度経済成長期と、その後における東京の都市発展の歴史を視覚的に説明する資料でございます。常設展示などで幅広く活用したいと考えております。

続きまして、5番目「明治初期の東京を写した古写真」でございます。こちらは資料6の7ページ目のNo.1、4、6から14に当たります。

東京のモニュメント的な風景を撮った古写真でございます。寛永寺の徳川家霊廟は、明治初期に一部が取り壊される前の様子を撮影した貴重な写真でございます。同じ写真が霞

会館、東京国立博物館に所蔵されていることから、横山松三郎または内田九一による撮影の可能性が高いものでございます。

筋違御門と八ツ小路の風景は、明治6年に石造りの万世橋がかかる前に撮影されたものです。

十二社の滝は、現在の東京都西新宿にあった熊野神社の境内にあり、明治26年の淀橋浄水場建設に伴い消滅をいたしました。

いずれも江戸から東京への移り変わりを端的に示す写真で、常設展示「江戸から東京へ」や、東京奠都150年を記念する諸事業などで活用したいと思っております。

続きまして、寄贈資料の説明に移らせていただきます。

1番目「CITY MAP CENTRAL TOKYO (GHQ東京占領地図)」でございます。寄贈者番号1番、説明番号が11ページのNo.1でございます。

終戦後の東京に駐留する連合軍の利用のために作成された1948年発行の地図でございます。2500分の1の縮尺で、建物、道路などの英語名が入った情報が掲載されております。

本図は、1947年に米空軍が撮影した航空写真をもとに作成されたものです。地上の建物などの記載は、第123施設大隊によって調査をされております。裏面は連合軍施設リストで、表面の地図と対応できるようになっております。

所有者ですけれども、元ツアーコンダクターでございまして、来日したアメリカの観光客に英語のガイドをしていた人物です。本図は、東京に元駐留をしていたというアメリカ人の方が、1970年代に観光で再来日した際、このツアーコンダクターである所蔵者にプレゼントしたものでございます。

続いて「村高家資料」でございます。寄贈者番号は8番、説明番号は標本の12から21ページ、No.53から325、映像音響資料は資料6の26ページ目ですけれども、そちらのNo.1でございます。

ジャーナリストで都市史研究者でもあった村高幹博の長女が所有していた同家に関する資料群でございます。

村高家は代々幕府に仕えた御家人で、幕末期の当主・村高孝之助は、維新後海軍省に出仕し、その長男である幹博は、国民新聞の主筆を務めました。

本資料は、村高家の由緒書のほか、東京市市政記者として市政改革の論陣を張った幹博が収集した文献や古文書の写しが数多く含まれております。これらの資料は、彼の都市論が確かな歴史地理研究に裏づけられたものであったということを物語るものでございます。埋もれていた都政史ゆかりの言論人の足跡を掘り起こすことができる貴重な資料と考えております。

続きまして「会水庵関係茶道具」でございます。寄贈者番号は9と12です。説明番号は、資料6の21から23ページ目、No.326から336、340から377でございます。

会水庵は、宗徧流の茶人山岸会水が建てた茶室で、平成10年より江戸東京たてももの園で公開をされております。会水の高弟と孫の家に伝わった茶道具、合わせて50点について寄

贈の申し入れをいただきました。

会水の焼印がある手づくりの茶碗や花入れなど、聴雪という名で描いた茶掛、大西良慶・桜間左陣ら、当時の文化人との交流を物語る書簡や茶杓がございます。中でも、讃岐漆芸の祖とたたえられる玉楮象谷の堆黒棗と、500年以上前のものとされる唐物茶入銘常陸帯は逸品でございます。以前寄贈を受けた資料と合わせて会水庵を特集した展示を組むことができるものとなっております。

最後になりますが、4番「江戸城の用材を利用した神札」でございます。寄贈者番号は13番、説明番号は資料6の23ページ目、No.378から379となります。

嬉野森稻荷と福寿稻荷の2体の神札です。墨書によると、文政3年に行われた江戸城本丸将軍御座所の修復時、部屋の長押に使われた用材の端切れを用いたというものです。これをつくった酒巻氏は、幕府作事方手代を務めた家で、稻荷は屋敷神として祭られていたものと思われま。

所蔵者の曾祖父・酒巻興敬は越後の出身で、初代新潟奉行・川村修就に仕え、安政5年に修就夫人の世話で酒巻幸之進の養子となりました。江戸城用材の伝存例として、また、江戸の信仰祭祀を知る上で珍しい資料と言えます。

説明は以上でございます。

大口委員長：ありがとうございました。

今の説明に何か質問などはありますか。

特になければ、例年どおり、別室に収集予定資料の展示がありますので、実物を見て、確認していきたいと思ひます。

それでは、よろしくお願ひします。

(委員離席)

(資料実見)

(委員着席)

大口委員長：皆さんおそろいだと思ひますので、再開させていただきます。

資料をごらんになって、御意見、御質問をいただきたいと思ひますけれども、例によってお一人ずつ、松尾先生から、よろしくお願ひします。

松尾委員：購入資料と寄贈資料を拝見させていただきました、購入のほうの資料は、前回はそうなのですが、子供の衣装と打掛を拝見して、保存もとてもいいですし、金糸が美しく、こういうような着物を今までどのような保存・管理をされてきたのかなとか、また、江戸博には既にいろいろな着物の収蔵品がおありだと思ひますけれども、それらとともに、将来に伝える着物の保存のあり方もきつとお考へになっていらっしゃるのではないかとと思ひます。

拝見して大変興味深く思ったのが、「錦絵・刷物類」で、御説明をいろいろいただきまして、「中村座内外の図」は6枚そろったというお話で、これを6枚合わせて展示されれば、かなり立派な展示物になるのではないかなと思ひました。それから「雨舎春の道づれ」

という刷物は、1枚ずつが大変大きくて、具体的に描かれていて、その時代の風俗がよくわかって、これも興味深い資料だと思いました。

あとは「明治初期の東京を写した古写真」ですけれども、寛永寺とか増上寺が今は全くその当時とは違ってしまっていて、明治初期の寛永寺や増上寺がより鮮明にわかるという点では、文書資料とともに、こうした写真資料も、今後あわせて検討されるべきと思った次第です。

やはり古文書の担当としては寄贈資料の中の「村高家資料」に注目しました。これは御家人の家の伝来資料ということで、今に伝わる江戸時代の御家人の資料は余りないのではないかと思います。江戸博にも幕臣の家の資料はおありだとは思いますが、貴重な資料です。ただ、その資料群が、本来の、村高家に伝来したものなのか、その後、収集したものなのかということをよく検討しながら、整理したり、研究したりする必要があるのかなと思います。

あと、興味深いと思いましたが「江戸絵図株帳」という資料です。江戸絵図の版元の名前がたくさん出てきまして、出雲寺など、私の知っているような版元も幾つもありまして、江戸絵図とともに、この資料を分析して研究するといろいろとわかっていくことがあり、新たな発見もあるのかなと思った次第です。

もう一つ、江戸城の用材を利用したお札というのも珍しいもので、初めて拝見させていただきました。

いずれも、江戸博の展示物としてふさわしいものではないかと思います。展示資料あるいは研究資料として活用されたらよろしいのではないかと思います。

以上でございます。

大口委員長：ありがとうございました。

それでは、森先生。

森委員：購入予定資料の中の「17世紀の江戸を紹介した洋書」は非常に有名な本で、名前ぐらいは今までも知っていたのですけれども、実物を見るのは初めてでありまして、大変迫力のある、将軍謁見の図とか、明暦の大火とか、そのほか、絵がいろいろ入っていたり、よくぞこういう本が残ったものだと、誰がどうやって保存して、今日これが伝わってきたのかと大変興味を持ちました。17世紀と言えば1600年代ですから、江戸初期の様子が非常によくわかった、大変貴重な資料だと思いました。本の大きさといい、厚さといい、精密に描かれた絵といい、見事なものだと思いました。

それから、寄贈予定資料の中で特に関心を持ったのは「村高家資料」です。村高幹博さんの長女が所有していた資料で、今、松尾さんからお話がありましたように、村高家というのは代々幕府に仕えた御家人であって、維新以降は海軍省に勤めたり、あるいは長男は国民新聞の主筆を務めたとか。この村高さんは、雑誌に『東京市の改造』という著作をあらわしております。それで、集めた資料を見ると、玉川上水とか、わりに武蔵野台地に関するものとか、あるいは御家人の由緒書、親類及び縁類の履歴書という非常に珍しい資料

が入っている。御家人の研究、御家人の資料というのはまだ発見されていないので、これも大変貴重な資料だと思いました。

そのほか、ちょっとおもしろいというか、考えさせられたのが、戦争中の「ボロの特別回収」というので「戦ふ近代兵器にボロが絶対必要です」と書いて、飛行機だとか、戦車だとか、軍艦の絵が載っていましたが、一体ぼろを何に使ったのかと。戦争も後半になると、もう資源もなくて、ぼろでも何でもかき集めて燃料にしたのか何にしたのか。「ボロの特別回収」というのは、いかにもせっぱ詰まった日本の状況を示しているのだなという思いがして、こういう資料も戦争資料としてはおもしろいというか、何か切迫したものを示しているような気がいたしました。

そのほか、嬰兒の1～2歳くらいの衣装だとか、ふだん余り目にすることのできない、いろいろな珍しいものが集められているので大変勉強になったり、驚いたりいたしました。以上であります。

大口委員長：ありがとうございました。

それでは、次に神谷先生。

神谷委員：初めて参加させていただきました。私は、今、名古屋市博物館におります。美術館に14年いたのですけれども、基本的には博物館がフィールドです。

当館でも同じような収集をしているのですが、なかなか全体を見せてもらえなくて、今回は単純に見る立場から見せていただいて、とてもうれしかったです。

博物館の物というのは、一つ一つはぬけがらでいけば、ごみのようなものなのです。それに命を与えるのが学芸員で、捨ててしまえばごみになるものに全部命を与えるという話をしているのですけれども、非常におもしろい資料がどんどん命を吹き返してくるような気がしました。

3つほどです。浮世絵の6枚ぞろい、10枚ぞろいというのはなかなかおもしろくて、単品でもおもしろいのですけれども、やはり数がそろいと、見る人は別な驚き方をするのだらうなということで、縦の6枚、3枚・3枚積み上げるのは初代豊国で、ちょっと珍しい作家なので、珍しいものを見つけてきたなという感じがいたしました。

それから、お茶の「会水庵」という建物があって、会水さんという人のつくったお道具、使ったお道具などがあるというのはやはりおもしろいと思います。しかも、手づくりをしていて、そんなにうまいわけではないのですけれども、その人の目指す茶の全体像をつかむには、建物だけではなくて、集めたもの、それから、自分でつくったもの、理想どおりできているかどうかはわかりませんが、そういうものも含めて、その人のお茶の全体像がわかってくると思います。

私どもでも、今、頭の痛いネタがありまして、森川如春庵という、割と有名な茶人で、鈍翁とも親しくしていた人の茶室を博物館の庭につくったらどうだということで困っているのです。お道具のいいものは、全部、先にもらってしまったのです。その中に、ものすごい茶碗もあるのです。博物館の敷地の中に建物をつくるのは問題が多いのですけれども、

その人のお茶の世界の全体像を知るためには、道具だけではなくて、ちょっと変わった「田舎家」という茶室ですけれども、それもあわせて見ていけばわかるなということで少し考えています。やはりお茶は、道具だけではなくて、建物もそうですし、全体で見えていただけるといのはうれしかったです。

あと、写真がいっぱいありました。そこでも話をしたのですけれども、いわゆる古写真、オリジナルの写真というのはどんどん色がなくなっていくと思いますので、ほかの写真もそうですけれども、コレクションに入れたらあれは早急に冷蔵庫に入れて、デジタルデータ化して、利用は全部それでやっていかれたほうがいいかなと思います。ほかにも古い写真、あれは本当にプリントでしたから、多分50年たつと、普通のところに置いておくと色がなくなってしまう可能性もあるので、今の状態でデジタル化してつないでいかれると思います。

個人的には、おもしろいと思ったのはほかにもいっぱいありましたけれども、関係するものとしてはそんなところで、非常に有益な資料だと思いました。

以上でございます。

大口委員長：ありがとうございました。

それでは、順番ということで私も一言申します。

一つは先ほど来お話の出ていました「村高家資料」は、きょう展示されている以外に目録を見ると膨大な資料だということがわかるのですけれども、その中で気になったのは、江戸時代の村方の資料が割ととばらばらに入っているのですね。これは多分、村高さんという方が、明治になってコレクションしたものがたまたま入っているのだと思うのですけれども、余り系統的に集められているとは思いきいんです。玉川上水というのが一つありますが、それ以外の地域でも断片的な資料が入っています。断片資料ではあるけれども、これは恐らく、地域にとっては、本来、村に残っているものがここに引き揚げられてしまっているわけですから、多摩地域の市史とか、博物館とか、そういうところにとってはかなり有力な情報もあると思うので、そういうことも含めてお考えいただければいいのではないかと思います。

それから、明治期のものに関しては、最初のところで明治以来の、150年の東京都の歴史を重点的に扱うという割には必ずしも多いわけではなくて、江戸時代の資料は保存するけれども、明治以降の資料は、今、どんどんなくなっていると思うのですね。これもたまたまあるのではなくて、博物館として、明治以降の東京都の歴史というのを意識的に、系統的にアタックして見つけていくということも一つ考えていただければいいのではないかと思います。

その中できょう出たのでは、GHQの東京占領地図という、要するに、連合軍が戦後すぐにつくった地図がありまして、それはそれでおもしろかったのですけれども、それを見ると、連合軍が東京の中で接収したお屋敷が全部ドットで記されていて、裏面は見なかったのですけれども、それが明らかにされるのではないかと。占領期の個々の屋敷がどうい

うように接收されたのかというのは、今まで余り研究もないのではないかと思うので、この辺は基礎資料として何か役に立つのではないかという印象を持ちました。

もう一つ、これも展示にはなかったのですが、目録によると、東京空襲を記録する会から今まで寄託されていた膨大な資料が寄贈されたという説明が先ほどありました。内容はわかりませんが、どうも見ていると、昭和20年11月からインタビュー記事がとられていて、それがオープンリールで入っているというのですが、もしそのままであれば、今、実際に聞くことができるのかどうかも問題だと思うので、せっかくいただいたものであれば、全部、何かの処理をして使えるようにするという作業も必要だと思います。テープとインタビュー記事が、とにかく膨大ですね。昭和20年11月から、何をインタビューしたのかというのは極めて興味があるのです。その当時に東京空襲の会がまだあるわけがないので、どこが一体インタビューしたのかという部分が、つながっているのかということも含めて、せっかく資料があるので、この博物館のどこかで全貌を明らかにしていただけるといいかなと思いました。

以上です。

では、金子先生。

金子副委員長：私は、まず購入のほうで工芸品です。前回同様、非常に高級な材料を使った染色というか、子供のものと打掛ということで、年代は少し差があるのかなと思いますけれども、なかなか保存もいいですし、非常にいいものだと思います。

それから、帛紗とか、仕覆とか、いわゆる更紗という名前で輸入されたものを切って使ったとか、同様に、金唐革も東インド会社などが輸入して、それを裁断して袋物にしていくと。もとの一枚革と、ちょっと折った跡があったので何かに使っていたのかもしれませんけれども、それを使った弁当箱がありましたね。もともと15世紀ぐらいからでしょうか、16から17世紀ぐらいが一番盛んなときで、スペインとかイタリアではやわらかくするために壁に張って、それが修理だとか、壊れたとか、はがれたとかということで、市場に出ると東インド会社が輸入して日本に持ってきて、それで加工するということですね。恐らくきょうの一枚物のものは、はっきりとはわかりませんが、16から17世紀ぐらいのいいものですよね。金唐革の中でも本格的なものは、徳川美術館などに江戸時代に材料として保存されていたのが今でも残っていますけれども、それに匹敵するぐらいのものではないかなと思います。非常に貴重なものです。大名家以外で持っているところは、江戸時代から染色の業者だったり、袋物の業者だったりというところには残っていますけれども、このように個人の中で、どういう経路でそれを。

そうか。これは購入ですから個人の所有ではないので、美術商とか書店からですね。どこかで手に入れられたのだと思うのですが、なかなかいいものだなと思いました。

それから、弁当箱はあけてみると、中もちゃんとした、いわゆる更紗で裏は張ってあって、全体が竹の製品だと思いますけれども、竹はほとんどわからないぐらいに覆っているわけですが、その中に重箱があって、三段重になっているのですが、どうしようにした

のですかね。それに食べ物を詰めてから、横倒しにして入れていますからどういものの中に入っていたのかちょっとわかりませんが、それから、金属のとめ金も上からかちつとはめて、ここにちょっとフックのようなものがついた、金をすっと入れるという、実に手の込んだ、なかなか高級な弁当箱だったと思います。竹の弁当箱としてもなかなかいいものですし、年代は江戸後期でしたかね。なかなかいいものがそろっていたと思います。

次は、もう先ほど神谷さんが触れられましたけれども、茶人の様子です。ちょうど昭和初期から10年代にかけてでしょうか。お茶人の様子、それから、お茶人の作陶というものがよくわかって、あのころのお茶人の、大先輩には半泥子などという人がいるわけけれども、半泥子の場合は本当に陶芸史に載っていてもおかしくないものをつくりましたが、今回の方はほとんどの趣味の世界ですね。

ちょっと今日残念だったのですが、中には赤楽があったり、それから、先ほど館長さんに言われてどきどきして答えられなかったのですけれども、常陸帯とか、三島の写しとか、古美術を予想させるようなものが幾つかあって、道具とか、一級の人と違う、少し庶民に近いといいますか、そういうお茶人の様子がよくわかって、もちろんもっと古今の名品を持っていられたかもしれませんけれども、今回の中にはそういうのはないので、実情はよくわかりませんが、そういう様子がよく見てとれたと思います。

それから、玉楮象谷の堆黒棗です。棗というか、あそこには中次とあったので、タイトルはそのままにしたほうがいいのかと思います。私たちのイメージする象谷とは少し違うのかなと思いました。模様スタイルは象谷スタイルと言ってもいいのですけれども、少し薄いので、象谷が自分の作品だと思ってつくったのは非常に深いものばかりですので、あるいは象谷工房の、そういうのがあったかどうかは知りませんが、工房の作品か、象谷が亡くなってから象谷スタイルでつくったか、それはお調べになったほうがいいのかと思います。

それから、個人的にはニッサンセドリック、ブルーバードのパンフレットに非常に感激しました。私より10歳ぐらい上の方なのか、車のモーターショーに行かれて、パンフレットがありましたけれども、あれで車が好きになって、車の世界に入って行って、随分きちんときれいにとっておかれたのですね。保存状態も当時のままみたいな感じで残っていました。

うちのおやじは車が大好きで、当時は自分では買えませんから、自家用車などはない時代ですから、会社に自動車クラブというのを無理やりつくって、そこで買わせて自分で乗っていたというあれなのですけれども、それでセドリックだとか、ブルーバード、それから、きょうここには出ていませんでしたけれども、日野のルノーがあって、それでたまたま何かの拍子で小学校に行くのに乗せてもらって、そうしたら、それが見つかって生意気だといじめられたりとか、そういう時代でした。

かき氷のあれなども、あんなのは私たち、オキュパイドジャパンの少年の時代にはなか

ったです。そういう意味で言うと、「Unconditional surrender」と書いてあるハンカチが出ていたのですが、ああいうのはものすごく悔しかったでしょうね。ああいう時代に生まれた人間としては、こんなものだったのだなという気がして、きょうは考えさせられるようなものが随分あって大変興味深いあれでした。すばらしいものだと思います。

それから、赤塚自得の書状があると書いておられますので、ぜひ何が書いてあるのか知りたいというのと、それから、東京の平和博覧会の絵はがきがずらっとあるようなので、また、展示等でぜひ見せていただきたいと思います。

以上です。

大口委員長：ありがとうございます。

それでは、山梨先生。

山梨委員：江戸東京の場所の歴史がよくわかる資料をたくさんお集めになっていらして、収集方針をととても意識して、学芸員の方々が努力されているということが大変よくわかりました。

美術工芸品は、それぞれ皆、状態もとてもよくて、展示ばえするものが多かったなと思っています。

東インド会社関連の資料ですとか、金子先生からもお話がありました金唐革とかビロード、そういったものは海外との交流を示すものですので、オリンピック・パラリンピックに向けて、日本と海外交流という視点から展示するのにもいい資料になるのではないかと思います。

それから、幕末・明治初期の写真は、先ほど神谷先生からもお話がありましたけれども、今、状態が非常によくて、砂利のところまでよく写っていて、あの画像は非常に大切なのでデジタル化しておいていただければ本当にありがたいと思います。ああいうものは幕末・明治初期のお土産絵とか、清親の浮世絵ですとか、そういうものともとても関係が深いものですので、展示活用のためにも非常にいい資料と思います。

先ほどもお話がありましたけれども、江戸城のお札は今ここで信仰儀礼の資料に分類されているのかもしれませんが、川村修就と清雄との関係というのがありますし、こちらに清雄の作品もたくさん入っておりますし、修就の資料もあると思いますので、そういった人間関係というところからも見ていけるような、活用も可能な資料ではないのかなと思っております。これも清雄のことをいろいろ追いかけておられる落合さんのお手柄ではないかと思います。

それぞれ、こちらの収藏品としてふさわしいものと思いました。

以上でございます。

大口委員長：では、植木先生。

植木委員：私は服飾と染織品についてお話しさせていただきます。

まず、説明資料の最初にあります一つ身ですが「『菊慈童』を想起させる御所解」と説明されています。御所解模様というのは武家の小袖の典型的な模様なのです。

こちらの江戸東京博物館のホームページから資料を検索できますよね。それで、今までどのぐらい御所解のものをお持ちなのかというのを調べてみましたら11点ヒットしました。ホームページにアップされているもの以外にも、服飾品、染織品があるようですが、とりあえず11点ヒットしたのですね。

御所解模様というのは、風景の中に王朝文学や能楽の内容を暗示させるものを配置するということなのですが、どの王朝文学なのか、どの能楽なのか、はっきりと出典がわからないような御所解風の模様も多いように思うのです。11点の中で特定できるものはそれほど多くはないような気がしたのです。それに比べますと、今回見せていただきました『菊慈童』は、はっきり『菊慈童』と特定できると思うのです。

見せていただいた状態は、着物の前の部分でした。あれだけですと、なぜこれが『菊慈童』なのかと思うのですが、後ろの裾のほうに、実は筆とすずりがありまして、それは『菊慈童』を象徴する模様ということで、しっかりすずりと筆が合わされていますので、御所解模様として非常にいいものかなと思いました。

それから、子供の着物で、さらに御所解ということがはっきりわかるものはほとんどないのではないかなと思うのです。そういう意味でも非常に貴重だと思います。御所解に限らず、子供物の着物自体、非常に少ないと思うのです。これもホームページの所蔵品検索で検索してみましたら、1点もヒットしなかったのですね。ホームページにアップされている以外にもお持ちなのかもしれませんが、子供の着物も大事かと思しますので、ぜひ購入していただきたいと思います。

それから、打掛のほうなのですが、武家の典型というように説明には書かれていますが、ちょっとこれはどうかなと思いました。武家の打掛の典型ですと、生地として、縹子ではなくて綸子が非常に多いのかなと思うのです。模様のつけ方も見せていただいたものとはちょっと違って、いろいろな種類の花束に、何か別の、例えば今回の場合でしたら唐扇でしたけれども、あとは有職風の模様とか、そういうものを組み合わせるといふものが多いのかなと思いますが、ちょっとそれとは違うかなという印象がありました。でも、典型ではないようなものもあるということも考えますと、そういうものも積極的に収集されるのがよろしいのではないかなと思います。

江戸の着物は、ホームページにアップされているものを見ますと全部で30点足らずですので、さらに江戸時代の着物を充実させるという意味で、ぜひ2点とも購入していただきたいと思います。

それから、着物ではなくて、4ページの8から10番についてです。いずれも外国から伝来した染織品を使った日本のものということになるかなと思うのです。こういったものも、外国の染織品の流入、摂取ということを物語る資料として貴重かと思えます。

それから、直接の染織品ではないのですが、先ほど森先生も言われましたように、戦時中のポスターで「ボロの特別回収」も大変興味がありました。ボロと近代兵器が直接結びつかないのです。ちょっとこれについて調べたいと思っておりますが、染織品の最後の形

はボロになるということで大変興味を持ちました。

さらに、これも直接の服飾・染織品ではないのですが、総武鉄道の写真の中に人物の集合写真がありました。そういったものも服装から見てみると、それも私にとっては非常に興味深いものでした。明治40年ということですよ。男性の服装を見ますと、全員洋装なのですが、背広とフロックコートの両方を着用しているのです。全体の中の3分の1くらいはフロックコートを着ていたということがよくわかる資料です。それから、フロックコートから背広にだんだん変化していくことになるかと思うのですが、明治40年当時では、まだフロックコートがかなり着用されていたということがわかる資料として興味深く拝見いたしました。

以上です。

大口委員長：ありがとうございました。

では、小島先生。

小島委員：この1月の委員会では寄贈資料がいつも出ておまして、生活に関連した非常に身近なものがいつもたくさん出ますので大変それも好ましく、江戸東京博の地域博物館としての特徴をよくあらわす収集になっていて、大変好ましいと思います。

今回も先ほどのパンフレットですとか、手回しかき氷とか、アイロンとか、非常に身近なものが入っていて、物によるアーカイブと言ったらいいのでしょうか、そういうものを構築していく上で、随時手に入るものを収集していくということで大変いいと思うのです。反面、何でこれが入るのだろうと、それだけ見るとよくわからないところがございまして、どこかの時点で何か区切りをつけて、こういう生活を再現するとか、残そうとしているのだという、もう少し大きいイメージをどこかで出していただけるとよいのかなと、感想ですけれども、ちょっと思いました。

それから、専門ということでもないのですけれども、個人的な関心で言いますと、錦絵関係で、中村座のものも大変いいですし、それから「雨舎春の道づれ」という、この10枚つづきのもの、役者絵ではあるのですけれども、当時の風俗を反映した一種の風俗史資料としても、絵も非常にきれいですし、大きい絵なので価値があるのではないかなと思えました。もしかすると、正月のものだけが別のセットになるのではないかなといった研究上の余地もまだかなりあるようですし、ぜひ今後、研究して活用していただければと思います。

この活用の際に、先ほども出たのですけれども、最近はデジタル化が非常に意味を持っていて、優品あるいは活用の余地が非常に大きいものは、そこが江戸博のような公的博物館に入った意義でもあると思うので、既に着手しておられると思うのですが、デジタル化をぜひ積極的に進めていただくと、江戸博のためだけではなくて、もっと広いいろいろな博物館にも使えますし、また、海外等への発信にもなります。

今回の28年度の方針の2番のところに「江戸東京博の常設展示にとどまらず、資料の貸借による博物館の相互交流」ということを入れていただいたのは非常によかったのではないかなと思うのですけれども、そういう意味で、こういう博物館にいい資料が入ると波及効

果も非常に大きいので、そういったところまで視野に入れて、積極的な活用を前提にした資料収集をぜひ進めていただきたいと思います。

最近、どこの博物館も購入予算が非常に厳しくてなかなかよいものが収集できずにおりますので、江戸東京博が積極的にこういう収集を続けていただくと大変ありがたいと思っております。そういう意味で、今回の資料はどれもよいものだったのではないかと拝見いたしました。

大口委員長：では、最後になってしまいましたが、中村先生、お願いします。

中村委員：江戸東京博という、非常に広いジャンルを対象にしていらっしゃる博物館の資料として、どれもとても有効だと思いますので、収集するというところに異論はございません。博物館は、そのときに資料と出会い、購入費があり、そして、収蔵庫があれば、基本的には収集していただきたいと思いますと思っておりますので、ぜひこれからも活発にいただきたいと思います。

ただ、やはり私どもは専門外もありますので、御説明のときに、さっきもお話が幾つか出ていましたけれども、今、江戸博では、これに類したこういうものを持っていると、その中のこれがどういう意味があるのかということをお手数かもしれないのですが少し説明していただければ、これはぜひというように私どもも理解しやすいと思います。江戸博はすごい資料をお持ちなので、私どもも全体像を理解することができませんので、そんなことをしていただければありがたいというのが一つです。

それから、これは収集に関することではないのですが、寄贈がございました。寄贈資料というのは、博物館にとって、とてもありがたい部分と厄介な部分を含んでいると思うのです。今回出されたものは本当に購入でもいいような、非常にレベルの高い寄贈資料でしたので、さすが江戸博だと寄贈でもこういうものの持ち込みがあるのかなと大変うれしく思いました。逆に、寄贈申し込みがあっても困るものとか、いろいろおありだと思いますし、それから、都民の中には、ぜひうちのこれを寄贈したいと思っていらっしゃる方もいらっしゃると思うので、寄贈の手続はどのようにしていらっしゃるのか。例えば申込書のようなものをお書きになるとか、部内で議論をなさってお断りになることも大変多いと思いますので、そこら辺、どうしていらっしゃるのか、私はきょう初めての参加ですので、寄贈について御説明いただければありがたいと思います。

新田事業企画課長：では、説明をさせていただきます。

資料の寄贈なのですけれども、お客様からいろいろな手段でお申し出をいただきます。最近ではメールでのお問い合わせも結構あるのですが、まず、寄贈者の方から通報があったときには、それを通報カードという紙に起こしまして、類似品が既収蔵品であるかどうかというのを確認します。収蔵品がなくて、また、お申し出いただいたものが当館に関連する情報があるとみなした場合、そちらの方にお会いをして、例えば伝世品でしたら、由来・伝来はどんなものですかとか、大きさがどうであるとか、状態がどうであるとかという調査をいたしまして、その上で係内で検討をしていくというところで、資料として資料化で

きるような段階になったところで、今回のように付議をさせていただくという流れになっております。

中村委員：お申し出はかなり多いですか。

新田事業企画課長：多いですね。多いときは年間で100件近くあります。

藤森館長：3日に1人ぐらいいるとのことですね。

新田事業企画課長：多いときはです。

藤森館長：これは写真もついてくるのですか。

新田事業企画課長：写真を撮って見せてくださる方もいらっしゃいます。あとは直接お持ちになる人もいます。

藤森館長：ここへ持ってくるのですか。

新田事業企画課長：はい。

中村委員：なるほど。

特に私は民俗の担当なのですけれども、民俗資料はなかなか購入ができないのです。購入で持ち込まれることは少ないので、結局寄贈に頼らざるを得ないですね。ですから、寄贈を適切にすることが民俗資料を収集する一番いい方法かと思っておりますので、ちょっと御質問いたしました。ありがとうございました。

大口委員長：皆様から御意見や感想をいただきました。

今、皆さんの御意見を伺った限りでは、本日ここに収集予定資料として出されたものは、いずれもこの委員会として収集をお認めしてもいいという御意見と受け取ったのですが、いかがでしょうか。よろしいでしょうか。

（「異議なし」と声あり）

大口委員長：では、皆さんから異議なしという意見をいただきましたので、収集を承認することに決定しました。

これをもちまして、きょうの審議を終了いたします。

では、あとはよろしく申し上げます。

富岡文化施設担当課長：大口委員長、金子副委員長、どうもありがとうございました。

本日の資料収集部会の議事録につきましては、冒頭申し上げましたとおり、収集が正式に決定した後に、事前に確認をさせていただいて、それから公開というようにさせていただきます。

それでは、これをもちまして「平成28年度第2回東京都江戸東京博物館資料収蔵委員会（資料収集部会）」を終了いたします。

皆様、どうもありがとうございました。

午後0時2分閉会

以上